

還相回向の課題

井 上 恵 樹

称仏名は、「称名念仏は彼仏本願行也。故修之者乘願願力」必得往生也（選択集）と確かめられて来た如く、凡夫の上に眞の救い、自利を成就する道であつた。では、それを成立せしむる構造的根拠はどこにあるであらうか。ここを問はずしては、凡夫成仏の唯一道とはいへても、それはやはり難行に甚えざる凡夫に如来の慈悲心が与えたせめてもの行ということとなる。正しくここに、この純粹自利の称名行は、極速円満なる無上道であることを、名号そのものの内から開顯してこなければならぬ。「南無阿弥陀仏」という本願をたてましまし、たその本願の只中から開いて来ねばならない。

ところで称仏名は、凡夫への往相の如來廻向である。それは、「南無阿弥陀仏」となるはずなわち安樂淨土に往生せむともふになる（銘文）と示される如く、諸苦毒海から光明海への或る意味に於る方向性が確立成就せられたことである。しかししてここに、その有限から無限への方向性を成就する往相道が、正しく外でもないこの此土の事実の上に、仏名号として既に表現され現存在することに驚ろかねばならない。衆生が阿弥陀に南無する道が、既に南無の機たる衆生海に事実成就している。それは、衆生海に在るものに外ならぬ名号「南無阿弥陀仏」に於て、「阿陀弥仏」が「南無」の機の上に自らを表現したとさえ言い得る。だから、衆生から如来

へという往相の方向性の成就のその一事実の只中に、如来から群生海へ沈潜・表現するという、根底的方向性が遂に憶念せられる。衆生が無有出離之縁の深信に於て阿弥陀に南無する、そういう「眞の凡夫の宗教」の成立根拠に、阿弥陀仏に南無せられて在つた群生海がある。「南無は帰命・発願廻向」を「帰命は本願招喚の勅命、発願廻向は如来已に発願して衆生の行を回施したまう心」（行巻）と領受した親鸞には、この消息が美事に感取せられていた。往相という方向性を支えて、その根底に一如に、如来より群生海を喚ばう方向性が在る。「法性のみやこより衆生利益のためにこの娑婆界に來たる」（唯文意）という「如来」根源の生命こそが、実は衆生をして「法性のみやこへむかへゐてきたらしめ、かえらしむ」。その限り、凡夫が往生定まるといふことは、凡夫をして一如界に帰らしむる本源の世界、衆生を喚ばうて止まず群生海の只中に表現してくるそういう大悲心の世界に突き当ることである。それはもはや、往相ということが往くことではなくて、衆生の本當に還るべき世界に還るという意味を開いて来るのである。弥陀淨土に願生することが、如来の衆生済度に遇うことである。

ところで、ここに云う、如より衆生済度に下るといふことは、生死稠林に遊戲して開化衆生する還相菩薩の働きのところに誠に具体的に示されているようである。「出第五門者以三大慈悲觀察一切苦惱衆生示示応化身一回入生死園煩惱林中遊戯神通至三教化地以本願力回向故」と天親が示し、曇鸞が「還相廻向」と名付けたことの上に、一切苦惱の群生に忍終不懈して能く衆生「入」の往相道を成就せしめる本願力廻向と同質なるものを見い出せるようである。つまり菩薩「入」の功德成就の奥にある出門の成就は、『入出

『二門偈』で示された如く本願因位の法藏においてのみ成就し得るものであり、その法藏菩薩こそ、正しく生死園煩悩林の諸苦毒中に我行精進する本願主体であるのである。還相廻向とは如来利他の用きと等しいところに感ぜられるものである。「言他力、如来本願力也」(行巻)の釈文を『論註』の還相廻向の文をもつてする所以である。誠に衆生往相の基底には如来還相の廻向がある。往相道の究極である一如の妙境こそが、正しく「徒如来生」と示される如く、衆生往相の根源力となり、還相の廻向と展開する。「証巻」の最初に、往相廻向の心行を獲れば必至滅度なることが示され、そしてそこに真如の転釈がなされた後に、それを承けて「然弥陀如来、從如来生、示現報応化種々身」と示される所以がここに在る。ここに、この如が等流する還相廻向の本願を即一なる背景としてこそ、称仏名は「念仏成仏」であり、往相廻向の心行を獲れば正定聚に住して必至滅度なのである。

ここに往生の内面界として還相の世界を了知することができる。ところでだからといって、この還相の世界が本願利他そのものと全く同義語であるとは云うことができない。何故ならば、還相廻向こそ、我が生死稠林に廻入して下化衆生するという大乘仏道の実践の課題を負うたものであり、「還相の利益」としてその課題を満足する世界が大きく在ると思われるからである。

還相は生死稠林に廻入して衆生を化益することと表現されている。その限り、それは人間存在として他一切衆生と共存して在るという自己存立意識に立つものであり、そういう自己の在り方を根源から済い切ろうと深く純化せられた願いが、自己が彼の土に生れ終つて、そこに一切他衆生在る生死稠林に還来して一切を化益しよう

還相廻向の課題(井 上)

という表現をとつたのである。しかし他一切衆生の済度を自己に負荷するは、限りなく重く、そこに人間業縁という根本迷を抜こうとする難事であるが故に、「小慈小悲もなき身にて利益有情は思うまじ」という、自己の無力さ・凡夫性の悲傷、深信に究まらずにはおかない。他一切衆生を済度せんという真摯な仏道的実践が、実は、他一切衆生が己れの「他一切の力なき衆生と何の別もなき済度さるべき凡迷の身に外ならぬこと」を現実をもつて深く教示するといふ、そういう究極を導くのである。この一点に、一切衆生を自身の内面に観て負荷して、「普く諸の衆生と共に安樂国に往生せん」と願生する、業縁的社会的凡夫が誕生する。しかしてここに、この一切他衆生の凡夫性を自身の只中に発見し、共に凡夫よりの解脱を全身をもつて求めねばならぬ我、凡情の身に、一点の虚偽もなく感覺感応せられてくるものは、自身住持の衆を求めず正しく一切衆生諸苦毒の只中に行精進して若生者不取正覺と誓願し給える法藏菩薩の在り方である。我等が上求菩提下化衆生する、その願いの真に純化された姿を、一切衆生を摂取して阿弥陀とならんとする法藏の上に見出すのである。我が身を一切凡夫と同生であると知る我は、一切衆生を救わんと我が凡身に働いてくる法藏の上に、我が下化衆生・還相を満足するのである。「還相の利益は利他の正意を顯す」とは、法藏の衆生済度の利他の用らきを我が還相と仰ぎ、我が身に信受することであり、それをもつて我が還相廻向成就する利益を受けるのである。ここに我等は下化衆生する。しかしまた我が還相として仰ぐ法藏利他の用きそのものに、我が身そのものが摂取せられ、即ち名号(往相廻向の不行)をうけて上求菩提を成ずる。この二面に於て念仏者は仏道の課題を成就するのである。